

# 生成AI活用による「気づき」を重視したライティング指導 A Writing Instruction Emphasizing 'Awareness' Through the Use of Generative AI

吉田信介（関西大学研究推進部）

Shinsuke Yoshida (Kansai University, Division for Research Promotion & Development)

## 要旨

生成AIを活用した英語ライティング教育の実践とその効果の分析を行なった。生成AIを使用することで、学生が「気づき」を得ながら自己訂正の力を向上させ、効果的な文章の推敲ができる目的とした。56名の大学一年生を対象に、JETROの動画を参考にした「日本の菓子の米国市場への商品紹介課題」について、生成AIツール(DeepL Write、Copilot、Perplexity)を用いて作文の授業を行った。その結果、ライティングのプロセス全体を生成AIが支援することで、学生の文章力と自律性を育成し、英語のニュアンスや文体への理解を深める効果が確認された。

**キーワード** 生成AI、気づき、プロセス・ライティング、自律的学習、フィードバック / **Generative AI, Awareness, Process Writing, Autonomous Learning, Feedback**

## 1. はじめに

日本のライティング指導は、1980～1990年代にライティングの認知プロセスが解明され、それ以降はプランニング、文章化、リビジョンの3つのプロセスを重視するプロセス・ライティングの研究が行われてきた。Ortega (2008) は、L2学習者の熟達度が上がるにつれて3つのプロセスのバランスが取れるようになるとしている。2022年度からの新学習指導要領では、高校英語「エッセイライティングI」の目標として、支援を活用しながら日常的・社会的な話題について複数の段落で論理的に意見を伝えられることが掲げられている。また、Swain (1993) のアウトプット仮説は、学習者がライティングや訂正のプロセスで表現の「穴」に気づくことが学習効果を高めるとしている。さらに、生成AIツールは自律的な書き手の育成を助け、教師の負担を減らしつつ、指導の焦点を高度な論理性に移す可能性があるとしている (Mizumoto, 2023)。このように、生成AIを活用したライティング指導では、プランニング、文章化、リビジョンのプロセスを経て支援ツールを活用し、自らの誤りに気づくことが有効な指導法と考えられる。

## 2. 目的

大学レベルにおいて、プランニング、文章化、リビジョンという3つのプロセスをへて、生成AIという一定の支援を活用し、自らの誤りに気づきながら、報告を行うというライティング授業を実践した。ここでは、その授業実践の内容と、学習者データによる分析結果を報告することで、今後の生成AI活用による英語ライティング教育の資料とする。

## 3. 方法

2024年10月11日に、大学一年生、56名（社会、史学）を対象として、以下の授業を行った。

まず、背景知識として、JETRO（独立行政法人日本貿易振興機構）のサイトで、「高級メロンと菓子を売り込め！ 米国食品市場への挑戦」のVTRを視聴し、日本産食品の米国食品市場への輸出における売り込みの状況を観察させた。

次に、課題として、「あなたは全米に向けて、菓子スタートアップ企業を立ち上げます。そこで、JETROの動画を参考にして、日常で消費しているあなたの『押しの菓子』を一点選んで調査し、現地向けの仕様と、『売り込み文』を英語で作成し

て下さい。」という指示を行った。

仕様として、菓子の日本名（URLを含む）、種類、英語のネーミング、パッケージの工夫、セルスピント、価格を報告するように指示した。

以下、手順1～4に従い、調査・報告するよう指示した：1) 自由選択した「押しの菓子」について、製造会社のホームページ（和文）を精査し、仕様にもとづくパラグラフを自分の英語力で作成する。2) 生成AI搭載の校正ツール DeepL Write<sup>1</sup>で推敲する。3) 対話型生成AI CopilotやPerplexityを使い、逆質問を活用して、改善し、提出する。4) 英語での気付き、工夫したこと、うまくできなかったこと、質問、生成AIの機能の新たな発見、その他コメントなどへの回答を行う。

この課題の意義は、リアルタイムに生成AIを活用することで適切な言葉の選択・言い回し・文体・語調の提案を行い文章を磨き上げていくことで、下書き作成の段階から執筆者を創造的に支援することができる点にある。また、生成AIツールで、英語の習熟度に関係なく、筆者の言語コミュニケーションを洗練させ、状況を限定することなくいかなる相手に対しても適切な言葉を見つけることができることであった。

## 4. 結果

DeepL Writeでの推敲、対話型生成AIによる改善・工夫のそれぞれにおいて、英語関連での気付き、工夫したこと、うまくできなかったこと、質問、生成AIの機能の新たな発見を集計した結果を、次の6カテゴリーに分類した。

### 4.1. 文法と語彙に関する学び

#### 間違いの発見と訂正

- 今まで自分が間違って覚えていた文法に気づかされた。
- 文法の間違いを細かく訂正してくれた。
- 前置詞や冠詞の間違いは見落としがちなので、訂正で気付くことができた。
- I want to を I would like to に変更され、丁寧なニュアンスに気づいた。

● He is teacher が He is a teacher に訂正され、冠詞の重要性を学んだ。

● 複数形や三单現 s が抜けがちに気付いた。

#### 語彙の発見と使い分け

- 絵は picture と思っていたが illustration や painting があることに気付いた。
- クリスピートクランキーの違いや、お菓子を sweets だけでなく candy と表現できることを知った。
- 香ばしいを上手く言い換えてくれて、そんな表現の仕方があるんだと新発見だった。
- 深いニュアンスの違い（fragrance vs. smell）に気付けた。

### 4.2. 生成AIツールの活用と感想

#### 生成AIの便利さと新たな発見

- 箇条書きになったが、生成AIに推敲してもらうと文を自然に繋げてくれ勉強になった
- 生成AIがお菓子の英語名まで考えてくれたのでとても助かった。
- 生成AIがユニークな商品名を提案し、チョコクランキーを Crunchy Choco Delight と命名できた。
- Copilot を使うと親しみやすく興味を引くような文になり、とてもよかったです。
- 生成AIで多様な言い回しができ、私にはよくわからないが直された表現のほうが英語圏の人には伝わりやすいのかなと感じた。
- Copilot が不足部分を指摘し、Why not try this today?のような追加提案を行った。
- 質問内容を具体化することで、生成AIが正確な情報を提示した。

#### 生成AIの限界や改善点

- 曖昧な日本語をAI翻訳しても正しい言葉にはならないことがわかった。
- スペルミスを訂正してくれない時があり、単語の一部が消えることがあった。

- Copilot は即回答してくれるが、まだうまく使いこなせない部分もあった。
- 「ふんわりとした触感」を soft feeling と提案してきたが、微妙なニュアンスが伝わらず苦労した。
- 饅頭のニュアンスが適切に英語に変わらず、自分で A treat for adults を考えた。
- 固有名詞が正確に校正されない。
- Copilot でスペルが不明な単語を正確に入力できなかった。
- 生成 AI での推敲後に自分で再確認する作業が必要だと感じた。

#### 4.3. 文体やトーンの違いに関する気づき

##### ビジネス文体への対応

- ビジネス用文体に変更するのは初めてだったが、堅苦しくなったのがよくわかる。
- 売り込み文なのでビジネス風の文章に訂正させ、格式ばった表現になり便利。
- 文体のトーンを「自信を感じさせる」にすると、売り込み文にぴったりだった。
- We sell delicious snacks が We proudly present our exquisite snacks と格式の高い表現になった。
- 热意を伝える文体でlove や!が多用された。
- 「フレンドリー」にすると文が長くなり、カジュアルな印象を与える。
- トーンを変えることで「広告に適した形容詞」が多用され、印象が変わる。
- ビジネス文体では、I want to を I would like to に変更してくれた。
- 親しみのある文体では let's が使われ、読者を巻き込む効果を実感した。

##### フレンドリーな表現との比較

- 同じ文でも、カジュアルなどに変えると、全然違う表現になり面白かった。
- ネイティブな表現にするよう頼んでも、短い文だとあまり変わらない。
- フレンドリーな文体にした結果、Thank you for your time! のように感謝のニュ

アンスを含む文が生成された。

#### 4.4. 作文の難しさと工夫

##### 表現の難しさ

- 英語で商品紹介するのは難しかったが、生成AIの添削のおかげで碎けた表現ができた。
- 自分で英語が出てこなかったところはニュアンスが似ているものを頑張って考えて書いた。
- 英語のネーミングと売り込み文を考えるのが難しかった。
- 香ばしいを適切に訳せず、Nutty aroma に変換したが、意図が完全に伝わったか疑問が残った。
- 生成AIが I recommend you try と提案したが、「おすすめ」にニュアンスが難しい。

##### 時間と作業の工夫

- 推敲すると自分が言いたいことと少し違った感じの文になってしまった。
- 短文の箇条書きを生成AIで繋いでもらつた。
- 生成AIの文に、自分で for adults and kids alike を追加し、対象顧客の幅を広げた。

#### 4.5. 教えてほしいこと

- なぜ特定の言い回しが正しいのか、そのニュアンスについてもっと知りたい。
- 難しい単語の意味を生成AIツール内で調べる方法があるのかを知りたい。
- 生成AIで校正した文章のニュアンスの違いをより深く理解したい。
- 適切な質問をすることで、生成AIから最適な回答を引き出す方法を学びたい。

#### 4.6. 今後の生成AI活用意欲

- Copilot は参考文献を提示してくれる点が便利だった。
- 生成AIが質問の逆提案をしてくれ、対話

が楽しく感じられた。

- 最近生成 AI を使う機会が増えた。
- 生成AIにより英語力を更に向上させたい。
- DeepL Write で文体の違いを学び、次回はさらに細かく分析したい。

以上をまとめると、DeepL Write や対話型生成 AI を使って英語の文章作成・推敲を行ったところ、文法や語彙のミスに気付いて修正できるだけでなく、複数の英語表現や微妙なニュアンスの違いを学べる点が評価された。一方で、曖昧な日本語入力やスペルミスが正確に訳されないなどの限界も指摘されており、最終的には人間が校正・調整する必要性が強調された。文体やトーンを自在に変えられる機能はビジネス・カジュアルを問わず活用範囲が広く、商品紹介や売り込み文などの作成に役立つこともわかった。また、より正確で効果的な英語表現を得るためにには、生成 AI から最適な回答を引き出すための質問の仕方を工夫することが大切という声もあった。参加者からは、英語学習の一環として今後も生成 AI ツールを使いこなしたいという意見が多く寄せられた。

## 5. 考察

これらの結果から六つの示唆が得られる。第一に、生成 AI のアウトプットを最大限に活かすには、入力（プロンプト）の具体性と明確さが不可欠であるということ。第二に、生成 AI が見落とす部分や微妙なニュアンスを補うため、人間側の再確認と最終調整は欠かせないこと。第三に、文体やトーンを自動で変えられる機能は、ビジネスシーンでも大いに活用が見込まれる半面、過度に装飾的にならないよう、利用者側のチェックが必要となること。第四に、生成 AI の校正や提案を通じて語彙力や文法力の強化につなげられる学習ツールとしての潜在力が高いこと。第五に、生成 AI が「なぜこの表現が良いのか」を解説できれば、さらに学習効率が上がり、より深い理解と説明力を得られる可能性があること。第六に、生成 AI は単なる翻訳・校正補助にとどまらず、利用者の英

語力アップやクリエイティブなアイデア創出のきっかけとなる「触媒」としての役割を果たす。

## 6. 結論

生成 AI は、単なる英語の翻訳・校正・提案ツールにとどまらず、教育、ビジネス、クリエイティブ分野、さらには社会全体にわたって大きな変革をもたらす潜在力があることが予測される。その際、入力の質や最終的な人間のチェックと微調整がますます重要になり、生成 AI のバイアス制御や説明能力の強化が大きな鍵となる。総合的に見れば、生成 AI との協働を前提とした学習・制作体制を築き、文化や文脈を深く理解した上で柔軟に表現を最適化していくことが、今後ますます重視されると考えられる。

## 註

<sup>1</sup> 文章によるコミュニケーションを磨ける生成 AI 搭載の文章作成アシストツールで、文法やスペリングの修正や別な言い回しの提案をとおし、文章作成を支援する。

## 参考文献

- Mizumoto, A. (2023). Exploring the potential of using an AI language model for automated essay scoring. *Research Methods in Applied Linguistics*, 2(2).  
<https://doi.org/10.1016/j.rmal.2023.100050>, (2024.10.20).
- Ortega, L. (2008). *Understanding Second Language Acquisition*, London: Routledge.
- Swain, M. (1993). The Output Hypothesis: Just Speaking and Writing Aren't Enough. *The Canadian Modern Language Review*, 50(1), 158-164.

## 謝辞

本研究の一部は、JSPS 科研費（課題番号 21K00693）の助成を受けたものです。